万載（まんざい）狂歌集・下

宇田敏彦・校註

校註者略歴

宇田　敏彦（うだ　としひこ）

1934年　愛知県に生まれる。
1961年　早稲田大学文学部卒業
《現在》　戸板女子短期大学教授
論文・校訂　天明狂歌，黄表紙の世界，未刊随筆百種，燕石十種，
江戸の戯作絵本，春町作黄表紙の虚像と実像他

〈お願い〉
☆現代教養文庫の定価は，すべてカバーに明記してあります。
☆万一，落丁乱丁の場合は，直接小社にお送りくだされば早速お取替致します。

© Toshihiko Uda 1990
Printed in Japan

現代教養文庫　1331　万載狂歌集　下

1990年3月30日　初版第1刷発行

校註者　宇田敏彦
発行者　宮川安生

発行所　株式会社　社会思想社

東京都文京区本郷3の25の13
電　話（03）813-8101（代表）
振替東京 6-71812　〒113

ISBN4-390-11331-3　三松堂印刷・小林共文堂

江苏工业学院图书馆
藏书章

現代教養文庫
1331

万載狂歌集　下

宇田敏彦　校註

社会思想社

万載狂歌集　下

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

〔凡例〕

一　漢字、仮名とも原本通りの字体での翻刻を原則とするが、特殊な略字体の漢字は現在使われている字体に改め、合字は漢字、仮名とも現行の字体に分割した。また近似した字体による混乱は文脈によって決定した。

二　仮名の反復記号（〻〱〲〳〵）は原本のままとするが、漢字の反復を示す踊り字（〻）は「々」に改め、「〳〵」はそのままとした。

三　原本にある振り仮名、振り漢字はそのまま翻字した。また読みの複雑な漢字には（　）を付けて仮名を振った。

四　明らかに脱字と思われるものには〔　〕を付けて補った。

五　作者の欄及び詞書の欄が空白になっている場合は、前出の歌と同一人の詠、または同じ詞書を持つ歌である。

六　註は各巻での初出の字句に付けるのを原則とした。

七　一首の解が多岐に渡ったり、複雑な場合には、適宜、補足説明や解釈を施した。

八　古歌については出来るだけ典拠を明らかにし、当代の歌については『狂歌若葉集』との異同を示した。

九　出典が歌合の形式を取るものについては、相対する歌及びそれらに対する判と判詞を添えて置いた。勝、負、持とあるのはその判で、勝、負は優劣を、持は優劣の付け難い場合をいい、判詞はその裁定事由であるが、これには抄訳を付けた。

十　読みが複雑と思われる作者名には、原則として、各巻初出のさいに振り仮名を振ったが、不詳なものには、便宜的に音読みにして付けた。

万載狂歌集巻第十

賀歌

無一草のおくにかきつけける　　志道軒

382　と、んとんとんと逢坂関が原うちおさめたるよろつ代のこえ

【無一草】延享五年（一七四八）刊の摺物『元無草』のことか。【とゝんとん】調子よく物を打ち叩く時の擬声語で、物事が順調に捗るときなどにもいう。作者の志道軒は有名な辻講釈師で、奇人としても知られ、浅草観音の裏手に高床を造り、これに座して講釈を語り、その話の合の手に、松茸形をした木の棒で机を打って、話の調子を取ったという。明和二年（一七六五）歿。八十三歳。【逢坂関が原】逢坂は大坂のことで逢う意を掛け、慶長十九年（一六一四）冬と翌元和元年の夏と二度にわたる大坂の陣と慶長五年の関ヶ

原の合戦をいう。【うちおさめたる】徳川家が豊臣家を討って天下に太平の世をもたらしたとの意に、怪しげな棒を打ちながら話を終える意を掛ける。『元無草』に「謡我」と題した漢詩とともに載り、『風流志道軒伝』（宝暦十三刊）の末尾にも収めるが、「逢坂」は「大坂」となっている。典拠を『無一草』と南畝がしたのは、この歌の後に「無一艸」（「無一」は志道軒の堂号）とあるのを誤記したものか。

哥合の中に祝　　布留田造（ふるのたづくり）

383　先以（まずもって）御機嫌のよき君か代をおそれなからも祝ふめてたさ

【哥合】『堀川百首題狂歌合』。『堀川狂歌集』所収。【先以】まず第一に。【君か代】貴方の寿命、年齢。【おそれながらも】恐縮ではあるが、もったいないことですが。

『堀川百首題狂歌合』末尾の歌で、右歌「金銀はつむ石倉のことくにていやか上にも治れる御代」に対し、「千秋万歳万々歳、と祝ひ祈り奉り畢（おわんぬ）」とあって、判詞、判ともにない。

寄民祝　　未得

384　活計にはらのふくるゝ世にあへハ天下たいへをこく土万民

【活計】豊かな暮し向き、贅沢な家計。【たいへ】太平（世の中が平穏無事なこと）の意に大屁（大きな音の屁）の意を掛ける。【こく土】国土に大屁をこくの意を掛ける。【万民】多くの人々、全国民。

『吾吟我集』五に同じ詞書で載る。

めてた百首哥の中に　　四方赤良

385　あいた口戸さゝぬ御代のめてたさをおほめ申もはゝかりの関

【めてた百首哥】『めでた百首夷歌』のこと。南畝最初の個人狂歌撰集で、天明三年正月刊。【はゝかりの関】憚関。陸奥国柴田郡の阿武隈川の傍（宮城県柴田郡柴田町）にあったと考えられている古関で、これに憚る（恐れ慎む）の意と憚り（便所）の意を掛ける。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

『めでた百首夷歌』には「関」の詞書で載る。下賤な者たちの勝手な評判は防ぐことが出来ないことをいう諺「あいた口には戸はたたぬ」による。

386　四方赤良の父自得翁六十一の賀に寄松祝といふ事を　智恵内子

六十とせにひと、せあまるひとつ松これからさきのよはひいく代そ

【自得翁】名は正智、通称吉左衛門、自得翁はその号。享保元年（一七一六）生まれ。享保十九年御徒となり、明和五年（一七六八）勤続足掛け三十五年の後隠居、天明八年（一七八八）九月九日死去。【六十一の賀】還暦の祝いで、安永五年（一七七六）九月三日自宅にて行われ、酒宴の席と翰墨場（詩文の揮毫会）を兼ねたという。「寄松祝」は当日の題であったと思われる。【ひとつ松】一松。近江八景の一つ「唐崎夜雨」で知られた唐崎（滋賀県志賀町）にあった名物の老松。【これからさき】これ以後の意に唐崎の意を掛ける。

387　千年と申すハおどけ松の春本卦(ほんけ)かへりを十(と)かへりの花　烏暁(うぎょう)

【おどけ】戯れ、冗談。【松の春】松の栄える春の意で、新春を賞美する語。【本卦かへり】本卦帰。生まれ年の干支(えと)になることで、六十一年目に回って来ることから、数え年で六十一歳になることをいう。還暦。【十かへりの花】十返の花。松の花の雅称で、祝賀の意で用いられる。松の花は百年に一度、千年に十度咲くという伝説に基づく。

六十になりけるとし松契多寿といふことを

388　琥珀(こはく)にもなるへき松のやにおやぢねはり〳〵ていく春やへん　杵庵(しょあん)

【松契多寿】松ハ多寿ヲ契ル。松の長寿にあやかるための賀詞で、契るは約束するの意。【琥珀】松などの樹脂が地中で化石化したもの。【やに】松の脂の意に脂っこい（しち難しい）親父の意を掛ける。

「我見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾代経ぬらむ」（『古今集』十七、『伊勢物語』

百十七、在原業平）を本歌とする。

松久緑　　一文字白根

389　よろつ代をせなかにせたら老松のミどりも久しかれいなるらめ

【せたら】背負ったら。【ミとり】松の常盤の緑の意にみどり子（赤子）の意を掛ける。【久しかれい】久しかれ（久しくあって欲しい）の意に嘉例の意を掛ける。

寄謡祝　　塩屋から人

390　盃をおさむる手にも高砂のまづ寿ふくをそいたゝいてのむ

【まづ】真っ先にの意に高砂の松の意を掛ける。高砂の松は、歌枕で名高い播磨国加古郡の高砂神社（兵庫県高砂市）境内の尉姥神社の前にある名物の相生の松をいう。【寿ふく】寿福。命を長らえ、幸せが多いこと。

謡曲『高砂』の詞章「をさむる手には寿福を抱き」を取る。

391　寄鍋真木祝　もとの木あミ

鍋のしりかけともつきぬすミの江の松の落葉ハめてたき木なり

【真木】燃料用の雑木。薪。【かけども】鍋の尻の墨（煤）を掻き取る意に松の落葉を掻く意を掛ける。【すみの江】摂津国住吉郡の歌枕の地住江（大阪市住吉区）に鍋の尻に付く墨の意を掛ける。住江は住吉ともいい、播磨国高砂の賀古の松原とともに松の名所として知られた。【めてたき木】松は千年の命を保つというめでたい木であるとの意に薪の意を掛ける。

謡曲『高砂』の詞章「朝夕にかけども落葉のつきせぬは」を取る。

392　寄台所祝　から衣橘洲

台所どんど、なるハ瀧の水いている客もたえすとふたり

【どんど〻なる】瀧の落ちる水音に台所の慌しい様を掛ける。【瀧の水】『三番叟』の文句を取り、これに江戸、神田和泉町（東京都千代田区神田佐久間

町）の四方久兵衛の店で売った銘酒の名の四方の瀧水を掛ける。【とふたり】『三番叟』の最初の章句「とう〳〵たらり〳〵ら」を取り、訪ふたり（訪れた）との意を掛ける。

『狂歌若葉集』では詞書を「台所祝」とし、第四句を「出入客も」とする。謡曲や歌舞伎芝居の『三番叟』の文句取り。

寄餅祝　　よミ人しらす

393　いくうすかつきぬよはひハ千とせふる鶴の子もちにちきりてハくふ

【つきぬ】餅を搗いたの意に尽きることのない寿命との意を掛ける。【よはひハ千とせ】齢は千年。鶴の寿命をいう。【鶴の子もち】長寿を祝う語である鶴の子の意に鶴の子餅（祝儀用で卵形をした紅白の餅）の意を掛ける。【ちきりてハ】千切る（手先で小さく切り取ること）意に契る意を掛ける。

中国の神仙譚に基づき、長生きで目出たいことを祝う諺「鶴は千年亀は万年」を取る。

394　寄鑓祝　峯松風

さて長い事かな君かおもちやりゆるかぬ御代の石突にして

【おもちやり】御持槍。所持する槍。【ゆるかぬ御代】揺るがぬ御代。安定して動揺することのない時代の意で、平穏無事の治世をいう。【石突】槍の柄の端を覆う金具の意に礎の意を掛ける。

395　寄舩饅頭祝　無銭法師

千年の鶴見ハおろか万代も永久橋にちきるまんちう

【舩饅頭】江戸の隅田川で小舟を使い、三十二文（米一升の値段という）の料金で売春した下等な遊女で、阿千代ともいい、その舟を阿千代舟といった。【千年の鶴見】諺「鶴は千年」を受け、武蔵国橘樹郡東部の東海道沿いの鶴見村（横浜市鶴見区）をいう。鶴見村には名物の米饅頭があって鶴見の饅頭の名で知られ、鶴屋、亀屋など七軒の有名店があった。【万代】限りなく続く代の意で、御代を寿ぐ祝詞。【永久橋】隅田川の中洲脇にあった橋（東京

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton